

子どもたちの困難に向き合って 本来の力を発揮できる社会へ



ディスレクシアの子どもたちの独創的な作品が集まった第3回ディスレクシア・アートコンペティション表彰式。当事者でベストセラー画家のマッケンジー・ソープ氏(中央)が特別審査員を務めた。4日、画像の一部を加工している。

20世紀末はまさに私にとって人生のリセットの時期であった。日本の公立小学校から全寮制の中高一貫校に進んだ長男が留学をしたいと言いつつ、探究心や好奇心やひらめきがある子だが、本人が日本の教育では自分らしく生きていけないので留学したいというのである。私自身が10年間ヨーロッパで育ったので、彼のスケールの大きさは海外で挑戦するのと同じ方法と賛成した。縁があり、英国への留学がなかった。数カ月後、一時的な能力に比べ英語の読み書きの習得が遅れている。ディスレクシアと疑われるので、検査をさせてくれないか」と学校から連絡が入った。

検査の結果、「軽度のディスレクシアとディスグラフィアがあるので学校として数々の『変更と調整』をして、彼の本来

認定NPO法人エッジ会長 藤堂 栄子

ディスレクシア
月間ロゴ



の力を発揮できるようにしていくがいかか？」と提案された。この『変更と調整』が現在、日本の障害者差別解消法でうたっている「合理的な配慮」の元となっている。

また、多くの当事者や保護者に出会い、アドバースをしてきた。当事者から学ぶことは多くある。その結果、浮き彫りになったのは読み書きができることよりも、内容にアクセスし考える力とメタ認知と呼ばれる自分のことを理解していることである。自分が得意と

息子からすぐに、「僕はまだ大丈夫！ 道が見えてきたけれど、日本で僕よりひどい思いをしてきた子がいっぱいいる。何かして！」と頼まれ、NPOを立ち上げ、「誰もが生き生きできる社会」を目指して活動するに至った。

この25年間で発達障害の読み書きのところにだけ手当てすれば、本来の能力を十分に発揮し、豊かな社会を構成する大切な一員として活動が期待されるにもかかわらず、現実的には学習に遅れ、不登校や引きこもり、心身の不調などで悩むことが多い。

エンパワメント・センター構想
これまで、「見方を変えて味方を増やす、エッジを生かしてエッジの利いた暮らし」を合言葉に活動してきたが、処方箋として循環する社会の仕組みが必要だと思う。単に読み書きができるようになるだけでは十分でなく、自信をもって本人らしき困難の理解と支援、アセッサ・養成講座など、保護者や本人の見方を変える「相談・アセスメント」、その先に学びの多様性に応える「学びのピユッフエ」、子どもたちの居場所と能力発揮の場「K&Tクラブ」、成人当事者の憩いの場「DX会」と発信の場「NOD E」、そして彼らがロー



差別解消法、読書バリアフリー法、支援策、教育政策等の制定に関わっている。

とどう・えいこ認定NPO法人エッジ会長。ディスレクシア当事者・保護者・支援者・研究者・活動家。日本発達障害ネットワーク(JDDnet) 副理事長、社会保障審議会障害者部会委員、教科書バリアフリー法読書バリアフリー法関連検討委員会などの委員を歴任。日本では知られていなかった読み書き困難の学習障害「ディスレクシア」の正しい認識を広め、発達障害者支援法、障害者

えて味方を増やす、エッジを生かしてエッジの利いた暮らし」を合言葉に活動してきたが、処方箋として循環する社会の仕組みが必要だと思う。単に読み書きができるようになるだけでは十分でなく、自信をもって本人らしき困難の理解と支援、アセッサ・養成講座など、保護者や本人の見方を変える「相談・アセスメント」、その先に学びの多様性に応える「学びのピユッフエ」、子どもたちの居場所と能力発揮の場「K&Tクラブ」、成人当事者の憩いの場「DX会」と発信の場「NOD E」、そして彼らがロー

一人ひとりに合った指導・支援を

東京都は全国に先駆け、既に多くの施策を実施してきている。都教育委員会ではICT活用のためのハンドブック「LIFT」や読み書きのアクセスメントを提供している。職員研修も、SENCO、SC、市区町村の教員向け、図書館、アーカイブの研修に呼ばれ、理解の広がりを実感している。「合理的配慮」の提供を民間も義務として2016年から実施。2Eやギフト教育、多様な選択肢、IGA、自校通級がかなう「特別支援教室」、都の職員として専門員の配置など枚挙にいとまがない。全国で使われて進んでいるヘルプマークのインシアチブも都が始めた。提言として、国語と英語、算数の教員、スクー高直氏の寄稿を掲載する。(編集部)

また、読み書きのアクセスメントやスクリーンングを就学時だけでなく、学年が上がっても継続して実施することを提案する。通常学級の中で子どもたちの困難さに気づき、子どもたち一人ひとりに合った指導法や支援を現場で行えるようになってほしい。

毎年10月はディスレクシア月間と決め、広く啓発に当たっている。ディスレクシアについて今よりもちよっとだけ知っていただけたらうれしい。

文字の読み書きがすらすらと正確にできない特性があり、40人学級に2〜3人の割合でいるといわれるディスレクシア。当事者団体として活動するエッジの藤堂会長に、ディスレクシア月間に併せて寄稿をお願いした。次号では当事者の長男・高直氏の寄稿を掲載する。(編集部)